

歐陽脩新発見書簡の特色について：新発見書簡 35「又（與孫威敏公）」、42「與劉侍讀」、69「與 杜郎中」、70「又（與杜郎中）」四篇と通行本書簡 との内容重複に着目して

東，英寿

九州大学大学院比較社会文化研究院文化空間部門国際社会文化専攻アジア社会講座

<https://doi.org/10.15017/26210>

出版情報：比較社会文化．19，pp. 57-64，2013-03-20．九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：



論文

歐陽脩新発見書簡の特色について —新発見書簡35「又(與孫威敏公)」、42「與劉侍讀」、69「與杜郎中」、 70「又(與杜郎中)」四篇と通行本書簡との内容重複に着目して—

Several Features of the Newly Discovered Letters of Ouyang Xiu: With Special
References to the letters 35, 42, 69, and 70

2012年10月31日受付, 2012年12月20日受理

東 英 寿
Hidetoshi HIGASHI

キーワード: 歐陽脩, 新発見書簡, 通行本書簡, 周必大, 歐陽文忠公集

一、はじめに

一般に、今から千年以上前に生まれ活躍した作者に、これまで全く知られていない作品がまだ存在していると、は到底考えられないであろう。長い年月の間に作品は収集され尽くしており、今となっては新たな作品が出てくる余地はないからである。

中国北宋時代の政治家で、詩人・文人でもある歐陽脩(1007～1072)は、生前に自分の作をまとめ、更に没後は関係者による収集作業を経て作品が網羅され、南宋の慶元二年(1196)に全集『歐陽文忠公集』が刊行された。もちろん、この全集から漏れた幾篇かの作品はあったが、後にそれらは全集に付け加えられており⁽¹⁾、千年の歳月を経た今日、全く知られていない作が存在すること自体、専門家であっても夢想だにしないであろう。

ところが、筆者はこれまで全く知られていなかった歐陽脩の書簡を九十六篇見つけ出した。これら九十六篇もの多くの書簡を発見したことについて、拙稿「歐陽脩の書簡九十六篇の発見について」の中で、どのようにして見つけ出し、それがどうしてこれまで知られていなかったのか等について考察した⁽²⁾。あわせて、九十六篇については拙著『歐陽脩新発見書簡96篇—歐陽脩全集の研究—』及び拙稿「新見九十六篇歐陽脩散佚書簡輯存稿」の中で、校点を施し整理して公表した⁽³⁾。その際、今回、新たに見つけ出した書簡九十六篇のうち、35「又(與孫威敏公)」、42「與劉侍讀」、69「與杜郎中」については、通行本の全集⁽⁴⁾に収録されている書簡と重複した内容が見られることを指摘していた⁽⁵⁾。

本稿では、それら三篇の書簡に70「又(與杜郎中)」を加えた四篇の新発見書簡に見られる通行本書簡との内容の重複について、それは如何なることを意味しているのかということに着目して、今回発見した書簡の特色について明らかにしたい。更に、このことを通して歐陽脩の書簡作成の過程や、歐陽脩の全集に書簡が収録された経緯等も窺うことができると考えられるので、以下具体的に考察したい。

二、新発見書簡42「與劉侍讀」について

まず、新発見の書簡42「與劉侍讀」について、通行本『書簡』巻五(『歐陽文忠公集』巻百四十八)に収録されている「與劉侍讀」其二十六と、その内容が類似しているのがわかる。比較のために、通行本所収の「又(與劉侍讀)」其二十六、新発見の42「與劉侍讀」の順に、以下原文を掲載する。

(通行本)「又(與劉侍讀)」 其二十六

某啓。賈常行，嘗附狀。辱書，承經暑動履康和。兼蒙惠以韓城鼎銘及漢博山槃記，二者實爲奇物。某集錄前古遺文，往往得人之難得，自三代以來，莫不皆有，獨無前漢字，每以爲恨。今遽獲斯銘，遂大償其素願，其爲感幸，自宜如何。屬患膝瘡，家居絕客，無人爲識古文。故第於郵中粗報已受二銘之賜，篆書當徐訪博識尋繹，續得附致。其餘區區，萬不述一，大熱慎護，以副瞻勤。清水安能久滯耶，實負愧也。

(新発見書簡) 42「與劉侍讀」 見履常齋石刻

脩啓。近買常行，曾致拙問。辱書，承經暑動履清勝，少慰瞻勤。兼蒙惠以韓城鼎銘、蓮勺博山槃記，不意頓得此二佳物。脩所集錄前古遺蹟，自三代以來，往往有之，獨無前漢時字，常以爲恨。今遽獲斯銘，遂大償素願，乃萬金之賜也。屬患脛（膝）瘡數日，家居絕客，無人爲辨古文，當徐訪博學者識之，續錄寄上。今且於郵中致此粗報，已獲佳貺爾。今歲大熱，疲病尤覺難支。西州高爽，更冀慎護，以副區區，不宣。脩再拜原甫安撫學士坐前。廿一日 謹空。

これらの書簡では、長年欲していた漢代の遺物を入手した歐陽脩が、その送り主である劉敞に感謝を述べ、今は膝の病気のため詳しくは考察できないが、詳しいことが明らかになれば連絡をするということも書かれており、ほぼ同じ内容で同一の書簡ではないかと思わせる。ただ文章表現には違いがあるので、まずそれぞれの書簡の以下の部分に着目したい。

(通行本)「又(與劉侍讀)」 其二十六

某集錄前古遺文、往往得人之難得、自三代以來、莫不皆有。獨無前漢字、每以爲恨。

某、前古の遺文を集録し、往往にして人の得難きを得、三代より以來、皆有らざる莫し。獨だ前漢の字のみ無く、毎に以て恨みと爲す。

(新発見書簡) 42「與劉侍讀」 見履常齋石刻

脩所集錄前古遺蹟、自三代以來、往往有之、獨無前漢時字、常以爲恨。

脩、集録する所の前古の遺蹟、三代より以來、往往にして之れ有り、獨だ前漢時の字のみ無く、常に以て恨みと爲す。

この部分、新発見書簡の方が字数が少なく、簡潔な表現になっているのがわかる。通行本所収の書簡では「私は前古の遺文を集めて記し、しばしば人が入手するのが難しいものを入手しており、三代以來、入手していないものはない。ただ前漢の時代の作だけがなく、常に恨みに思っている」となり、一方新発見書簡42では「私が集めて記した前古の遺蹟については、三代以來、しばしば入手しているが、ただ前漢の時代の作だけがなく、常に恨みに思っている」となり、新発見書簡42の文章の方が簡潔になっているのがわかる。これらの文章の比較から、通行本の書簡を修正して新発見書簡42が出来上

がったのではないかということを感じさせる。このことに関連して、『朱子語類』卷百三十九の次の逸話が想起される。

又曰、歐公文亦多是修改到妙處。頃有人買得他醉翁亭記藁、初說滁州四面有山、凡数十字。末後改定、只曰環滁皆山也五字而已。

又た曰く、歐公の文も亦た多く是れ修改して妙處に到る。頃ごろ人有りて他の醉翁亭記藁を買ひ得たり、初めは滁州の四面に山有り、凡そ数十字と説く。末後改定し、只だ曰く滁を環りて皆山なりの五字のみと。

初稿では、滁州の地形について「東方に某山あり、南方に某山あり……」と四方の山々を列挙して記述していた部分を、決定稿に至って「環滁皆山也」(滁州のまわりは皆山だ)の僅か五文字にまとめ上げた。推敲の過程で歐陽脩は表現を大幅に変更し、文章を簡潔にしようとしたことが窺える。こうした修改は、歐陽脩得意の文章作成法であり、南宋の周必大は「歐陽文忠公集後序」の中で次のように記述する。

前輩嘗言、公作文、揭之壁間、朝夕改訂。今觀手写秋声賦、凡数本、劉原父手帖亦至再三、而用字往往不同。故別本尤多。

前輩嘗て言ふ、公は文を作るに、之れを壁間に掲げ、朝夕改訂すと。今、手写の秋声賦を觀るに、凡そ数本、劉原父の手帖も亦た再三に至って、用字往往にして同じからず。故に別本尤も多し。

歐陽脩は原稿が完成した後、壁にその作品を掲げてくり返し推敲していた。歐陽脩が何度も修改したため、「秋声賦」には幾つかのバージョン、つまり初稿から決定稿に至るまでの数種類の別本が存在していたと言う。これと同様に書簡の作成においても、歐陽脩はいつもの習慣でその文章を何度も推敲していたのではないだろうか。

更に、通行本収録の書簡では歐陽脩が手に入れた遺物が、「韓城鼎銘」、「漢博山槃記」と記載されているが、新発見書簡42では「韓城鼎銘」、「蓮勺博山槃記」となっている。「韓城鼎銘」については『集古録跋尾』に記載が残っているが、「博山槃記」については『集古録跋尾』に記載がなく、その内容を確認できない。ただ、通行本所収の書簡に言う「漢博山槃記」が、新発見書簡では「蓮勺博山槃記」となっており、「漢」という漠然とした記述か

ら「蓮勺」という具体的地名に変更されているのがわかる。金石遺文に興味を懷き、漢代の遺物をやっと劉敞から入手した歐陽脩が、その資料を基に考察を進めた結果、「漢」から具体的に「蓮勺」という地名に変更したと思われる。こうした記述の変化からも、この二通の書簡の前後関係を見て取れるのではないだろうか。このような文章表現の修改や記述内容の深化から、通行本所収の書簡（「又（與劉侍讀）」其二十六）が先に作成され、その後に修正されて新発見書簡42（決定稿）になったのではないかと考えられるのである。

新発見書簡42が決定稿であるということを裏付ける証拠として、新発見書簡42の最後に、宛名が記入されていることが挙げられる。実は、通行本の「又（與劉侍讀）」其二十六と42「與劉侍讀」の書簡における最も大きな異同は、新発見書簡42には本文の最後に「脩再拜原甫安撫學士坐前」という語句、つまりこの書簡を送った相手の名前が記入されており、一方、通行本所収の書簡には最後に相手についての記載がないということである。相手の名前が具体的に記入されていることこそが、実際に送った書簡の明証だと言えるのではなからうか。

歐陽脩は書簡を作成する際に、決定稿以前の原稿に修正を加え、最後の決定稿に至って初めて相手の宛名を署名した可能性が高い。最初の原稿では相手の宛名を入れずに、その後修正を加えて本文を確定し、実際に送る段階になって文末に初めて相手の名前を記入しても何ら不思議ではなからう。ここから歐陽脩の書簡作成過程、すなわち当初の原稿を修正した上で、内容を確定させ、最後に相手の名前を署名するという方法が見て取れる。そして、最終的に相手に送った実際の書簡（新発見書簡42「與劉侍讀」）以外に、草稿（決定稿以前の通行本所収「又（與劉侍讀）」其二十六）が遺されており、それが後に通行本に収録されたと考えられるのである。

三、新発見書簡69、70「與杜郎中」について

次に、新発見書簡69、70の「與杜郎中」と内容の重複がある通行本所収の「答杜植」（『書簡』巻八）との関連を見てみたい。

通行本「答杜植」

某啓。公私多故，久闕馳誠。然亦久不承問。忽於通中辱書，喜慰無量，兼審經寒動履清勝。不相見數年間，親舊零落，所有無幾。在者衰殘老病，於理宜然。其間不能量力決然早去，而留連祿仕，任過其分，勉強碌碌，迄無可稱，以取責於一時，而貽譏於後生，則鄙人於數老叟中，又獨負此。若寵利紛華，不惟非

素心所溺，就令心有所好，大抵晚年實能享者，於身所得幾何。由是言之，得失不較可知。自去夏迫今，病恙交攻，尤苦齒牙，飲食艱難。則嚮所謂於身所得者，無復有爾。可嘆可嘆。不相見久，因書及此，聊當一笑爾。聖俞家，賴諸故人力，得不失所，漳州兒子輩更在教育，他事應在雅懷，有以處之，不待言也。新歲千萬加愛。因風不惜惠問，以慰瞻仰。不宣。某再拜。

友人達は亡くなり、生存している者も年をとり老い衰えてしまった。その中で、私は任官しているが、役に立たず、賞賛されることもない状況で、去年の夏から病気に苦しんでいる。梅堯臣の家の子ども達は教育中であり対処をよろしくしてほしいという内容の書簡である。

これに類似する内容を持つのが、以下に挙げる今回発見した書簡69と70である。

（新発見書簡）69「與杜郎中」 以下二帖真蹟藏汪達家脩啓。公私多故，頗闕致誠。辱書，承經寒體況康福。相別數年，交游日益零落，在者不老則病，理亦宜然。脩多難早衰，曩嘗屢自懇激，冀鄉里一麾，漸爲歸計。誠願未遂，遽誤器使。貪冒榮寵，忽已三年。碌碌無稱，附仰羞愧。第未有必去之名，不欲輕發。然愈久則責愈多，豈懷安苟偷于此者，不知所以勉強之方。故人其何以見教。茲語難爲不相知者道也，幸察幸察。自去年夏秋以來，百疾交攻，尤苦牙車，飲食艱難。此前所謂理宜然者，不足具道也。相見未涯，惟多慎愛，以副瞻企。脩再拜挺之郎中運使執事。正月十九日。

兩目昏淚，臨書不知筆畫輕重，可歎可歎。

この書簡69では、友人達は亡くなるか老い衰えている中、帰郷したいと思っていたが、任官して三年がたってしまい、役に立たないままこの職についており、去年の夏より多くの病気が出てきているという現状を述べている。

（新発見書簡）70 「又（與杜郎中）」

昨自聖俞云亡，識與不識，皆爲之出涕。蓋其材可惜，其志可悲也。況於吾儕，宜如何爲懷。其嗣子孤弱，未堪家事，雖相知竭力，未知果不失所否。吾徒老大，朋游零落殆盡，存者無幾，又苦乖離。就使幸而相聚，索然數衰翁，豈復昔時情緒，徒益可悲爾。漳州之後，何嘗忘之，深可念也。脩兩手指節拘攣，屈伸皆難，目愈昏暗，自非久處于此所宜。獨得免於罪戾而去，則爲幸也。相見何時，鄙懷難遽盡道，南望瞻渴。脩頓首。

この書簡70から、歐陽脩は梅堯臣が亡くなり悲しんでおり、梅堯臣の子どもが幼いので心配していることが窺える。

筆者は、拙稿「新見九十六篇歐陽脩散佚書簡輯存稿」の中で、通行本の「答杜植」と新発見書簡69の内容が類似している部分があると指摘していたが⁽⁶⁾、70との類似については洪本健氏の指摘によった⁽⁷⁾。70と通行本の「答杜植」とがどこまで類似しているかという判断は難しいが、梅堯臣に関する記述という点に着目すれば類似していると言うことはできよう。

これら書簡の内容から考えると、通行本の「答杜植」では、歳をとり衰えたが新たに任官したこと、梅堯臣が亡くなったことの大きく二つの話題に分けられるが、新発見の69では歳をとり衰えたが任官したこと、70では梅堯臣が亡くなったことを専ら記述している。このことから、通行本の「答杜植」の内容を、69と70の二つの書簡に分けて記載したのではないかと思われるのである。すなわち、当初杜植への書簡として、頭に浮かんできたことを次々と書き留め、その後文章を推敲し修改した上で内容に基づいて二つの書簡に分けたと考えられないだろうか。それを裏付ける証拠として、通行本所収の「答杜植」では最後に相手に対する記述がないが、69の文末には宛名が「脩再拜挺之郎中運使執事」とあり、更に追伸に相当する「兩目昏淚，臨書不知筆畫輕重，可歎可歎」が書き加えていることがあげられる。ここからも69が実際に送られた書簡であることが窺われるのである。

洪本健氏は前掲した論考の中で「正説明此二簡与叢刊本《答杜植》当為同年作。但就内容而言，後者乃合二為一、原因尚待查考」と記述し、通行本(『四部叢刊』所収本)の「答杜植」が、新発見の69と70の書簡を合わせた形になっているとして、今後の検討が待たれると述べる⁽⁸⁾。しかし、前述した新発見の書簡42の場合と同様に、69の末尾に署名があることから、通行本所収の書簡は当初歐陽脩が作成した原稿であって、新発見書簡69、70が実際に送られた書簡だと考えられる。従って、この洪本健氏の視点は反対であり、通行本所収の「答杜植」が先に作成され、その後修改の過程で内容を整理して新発見の69と70の二つの書簡に分けて杜植に送られたと言えるのではないだろうか。

ただし70の文末は「脩頓首」で終わり、相手の名前が記載されてはいない。しかし、この70は、69とともに「以下二帖真蹟藏汪達家」という注があることから、汪達の家から出てきたという収蔵元がはっきりと確認できる。草稿が遺されていたと思われる歐陽脩の家以外から、69、70が出てきたということは、やはり実物の書簡であることを物語っているのではないだろうか。汪達

は、陶宗儀『南村輟耕録』卷十五、淳化閣帖の中で、

汪達、字季路、衢州人。官至端明学士、建集古堂、藏奇書秘蹟金石遺文二千卷。

汪達、字は季路、衢州の人なり。官は端明学士に至り、集古堂を建て、奇書秘蹟金石遺文二千卷を藏す。

と記載されており、「奇書秘蹟金石遺文二千卷」を収集して所蔵していた。汪達が収集した多くの資料の中に、実際に歐陽脩が送った書簡が存在していたのである。ちなみに、前述した新発見書簡42には「見履常齋石刻」という注が附されており、歐陽脩の実際の書簡が石刻として残っており、その石刻に基づいて書簡42が採録されたと言える。このように、歐陽脩家以外の収蔵元から出てきたという状況がはっきりしていることから見ても、今回新たに発見した書簡は、実際に送られたそのものの自体が、送られた相手側から出てきたものだと考えられるのである。

四、新発見書簡35「又(與孫威敏公)」に関して

最後に、新発見書簡の35「又(與孫威敏公)」に関しては、次にあげる通行本の『書簡』卷三(『歐陽文忠公集』卷百四十六)に収録されている「與馮章靖公」其一と、その内容がほぼ同一であるということについて考えたい。

(通行本)「與馮章靖公」 其一

某頓首。區區久闕致問，中間辱書，爲感何已。冬寒，伏惟台候萬福。某以衰病，期一作思得一小郡養拙，三二年間，謀一歸老之地。此願未獲，遽被責以吏事，精力耗竭，何止彊強。不出歲末春初，當有江西之行矣。薛親幹敏，河東風土民間事緒可以詢問，得佐幕府甚幸甚幸。某爲目疾爲梗，臨紙草率，惟冀鎮撫外以時爲國自重。

(新発見書簡)35「又(與孫威敏公)」

脩頓首啓。區區久闕致問，中間辱書，爲感何已。冬寒，伏惟台候萬福。脩衰病，思得一小郡養拙，三二年間，謀一歸老之地。此願未獲，遽被責以吏事，精力耗竭，何止勉強。不出歲末春初，當在江西矣。薛親幹敏，河東土人民間事可詢問，得佐幙府甚幸。脩爲目疾爲梗，臨紙草率，惟冀鎮撫外以時爲國自重，不宣。脩再拜河東安撫觀文學士坐前。十七日。

これらの書簡には、あなたからの書簡を受け取ったこ

と、自分は衰えて病気となり致仕する土地を探していたが願いがかなわずに仕官したこと、年末年初は江西にいること、河東のことは薛親にたずねてほしいこと、目の病気であるということ等が記載されている。

さて、通行本「與馮章靖公」と35「又（與孫威敏公）」を詳細に比べると、以下の八箇所で見られる。

「與馮章靖公」其一	35「又（與孫威敏公）」
① 某頓首	→ 脩頓首啓
② 某以衰病	→ 脩衰病
③ 期一作思得一小郡養拙	→ 思得一小郡養拙
④ 何止彊強	→ 何止勉強
⑤ 當有江西之行矣	→ 當在江西矣
⑥ 河東風土民間事緒可以詢問	→ 河東土人民間事可詢問
⑦ 得佐幕府甚幸甚幸	→ 得佐幙府甚幸
⑧ 某爲目疾	→ 脩爲目疾

③については、通行本に「一作思」という小字の注があり、35「又（與孫威敏公）」ではその注記の記述が用いられていることになり、④については字体の異同で、⑦は字体の異同と通行本の「甚幸甚幸」が35では「甚幸」になっているに過ぎない。⑤については、通行本の「當有江西之行矣」という記述が、35では「當在江西矣」になっている。また⑥は、「河東風土民間事緒可以詢問」という通行本の記述が35では「河東土人民間事可詢問」となっている。①、②、⑧は通行本の「某」が35では「脩」となり、更に①は「頓首」の後に35では「啓」が付け加えられ、②は通行本の「以」が35では削除されている。

このようなこれら二つの書簡の間に見られる異同は、表記上の小さなものに過ぎず、従ってこうした異同は文意を変えるものではなくないと言える。つまり、通行本に収録されている「與馮章靖公」其一と、今回発見された35「又（與孫威敏公）」は決定稿とそれ以前の原稿という違いはあるが、同一の書簡だと考えられるのである。

ところで、「與馮章靖公」に言う馮章靖公とは、馮京（1021～1094）、字は當世のことで、王安石の新法に反対した人物として知られている。一方、今回発見した35の書簡を歐陽脩が送った相手である孫威敏公は、孫沔（996～1066）、字は元規のことである。二人とも歐陽脩との交流があり、書簡の宛名から見ればこの書簡はどちらに送られていても不思議ではない。

通行本に収録されている書簡「與馮章靖公」其一と今回発見した書簡35「又（與孫威敏公）」の大きな相違は、通行本の書簡の最後である「爲國自重」の後に、35「又（與孫威敏公）」では「不宜。脩再拜河東安撫觀文學士坐前」

という宛名の署名があるということである。これは前述した新発見書簡42、69、70と同様に、書簡35が実際に送られた書簡であることを物語っている。一方、通行本に収録されている文末に宛名のない書簡は決定稿前のもので、実際に送られたものではないと思われる。

そもそも、歐陽脩の全集『歐陽文忠公集』百五十三卷は、歐陽脩が没した百二十四年後の慶元二年（1196）に周必大らの編纂によって完成した。書簡は公開する性質のものではなく、あくまで個人に宛てた私信であり、当然ながら後からそれを収集するのは非常に困難である。しかも、周必大らにとって、歐陽脩は百二十数年前の人物であり、歐陽脩の書簡を集めると言っても、収集方法等どこから取りかかってよいのか途方に暮れたに違いない。そういう状況で、周必大らがとりえた手段は、歐陽脩の家に伝わって来た資料から見つけ出すという方法であろう。全集の編纂者の一人である丁朝佐は、卷十四の校勘記に「朝佐攷公家定本」として、「公家定本」すなわち歐陽脩家に伝わっている定本を用いたと記載している⁽⁹⁾。ここから、周必大らが全集を編纂した際に、歐陽脩家に遺されていた資料が用いられたことが窺える⁽¹⁰⁾。更に、前述した表現上の異同の中で、①、②、⑧において、新発見書簡35で見られる「脩」の字が、通行本では「某」となっていることも、通行本の書簡が歐陽脩家に遺っていたことを強く窺わせる。なぜならば、先祖の諱を避けて「某」と表記するのは当時の通例であり、従って通行本に見られる「某」は歐陽脩の子孫が諱を避けて変更したと思われるからである⁽¹¹⁾。ここからも通行本の書簡が歐陽脩家の資料から出てきたもので、実際に送られたものではないと言えるであろう。

このように、周必大らは全集に収録される『書簡』を編纂した際に、歐陽脩家に遺されていた資料等から、歐陽脩の書簡を収録したのであり、実物の書簡、すなわち歐陽脩が送った相手先に遺されていた書簡を採録したのではなかったのである。つまり、歐陽脩が亡くなって百年以上経過していた周必大らにとって、実物の書簡を探し出すのは至難の業であり、全集編纂の際に彼らは歐陽脩の家に遺されていた草稿（決定稿以前のもの）を収録するしか方法がなかったのである。

既述した如く、歐陽脩は書簡を作成する際に、本文を確定させて初めて相手の名前を文末に署名するという方法を取っていた。そのため、通行本に収録された決定稿以前の書簡では宛名を記載していなかった。それらの資料は歐陽脩家に遺されており、かかる資料を入手した周必大らは文末に署名が記入されていないので、全集の『書簡』十巻部分を整理して編纂する際に、この書簡を間違えて馮章靖公に送ったものと誤記したのではないだ

ろうか。新発見の書簡を受け取っていた孫沔は、『宋史』卷二百八十八、孫沔伝に「又遷禮部郎中、爲環慶路都總管、安撫經略使、知慶州。……歴知陝西、河東都轉運使……、又遷觀文殿學士、知并州」とあるので、今回発見した書簡35の宛名である「河東安撫觀文學士」と符合している。しかも、この書簡は32「與孫威敏公」の注に「汪達云、以下四帖真蹟傳于外家」とあることから、汪達の外家、すなわち汪達の妻の身内から出てきたという収蔵元のはっきりした記載もある。とすれば、新発見書簡35は孫沔へ送られた実際の書簡であることは間違いない。従って、この書簡と同一と考えられる通行本所収の書簡につけられた「與馮章靖公」という表記は、周必大らが編纂する際に間違えたものだと考えられる。歐陽脩が馮章靖公に送ったとして通行本に収録されていた書簡（「與馮章靖公」其一）は、実際には孫沔に送られた書簡であることが、今回発見した書簡から裏付けられるのである。

五、おわりに

新発見書簡である、35「又（與孫威敏公）」、42「與劉侍讀」、69「與杜郎中」、70「又（與杜郎中）」四篇と通行本所収の書簡における内容の重複に関する考察から、今回の新発見書簡は実際に歐陽脩が送った書簡で、それが送られた相手側から出てきたものであり、一方今日の通行本に収録された書簡は、決定稿以前の原稿で周必大らが代々歐陽脩家に伝わってきた資料に基づき整理したものであるということを明らかにした。

ところで、北宋文人の全集は南宋時代に編纂されることが多いが、その際にどのようにして書簡が収録されたのかというのは実に興味深い。というのも、書簡は個人宛てた私信であり、一般に公開されるものではないので、全集に収録された過程が明らかでなかったからである。これまでその書簡が実際に送られたものかどうかを確認できなかったという資料上の制約もあり、全集にどのようにして書簡が収録されたのか詳細な考察はできなかった。しかし、今回発見した歐陽脩の書簡は、実際に送られた相手側から出てきたものと確認できるので、それを通行本の全集に収録されている書簡と比較することによって、書簡を収録する過程の一端が明らかに浮かび上がってきた。このように、今回発見した書簡は、南宋当時の全集の編纂過程を考察するに当たって、有力な手掛かりを与える資料となることは間違いないのである。

注

- (1) 『歐陽修全集』（中華書局、2001年）前言において、清代の歐陽衡がそれまでの全集に知られていなかった七篇の作品（「本末論」、「時世論」、「幽問」、「魯問」、「序問」、「與黃謂」、「與李吉州」）を付け加えたことを指摘している。
- (2) 拙稿「歐陽脩の書簡九十六篇の発見について」（『日本中国学会報』第64集、2012年10月）。なお、この拙稿は日本中国学会第63回大会（2011年10月）での研究発表をまとめたものである。
- (3) 拙著『歐陽脩新発見書簡96篇－歐陽脩全集の研究－』（研文出版、2013年2月）。拙稿「新見九十六篇歐陽脩散佚書簡輯存稿」（『中華文史論叢』2012年第1期、2012年3月）。
- (4) 通行本の全集とは、今日、歐陽脩のテキストとして最も多く用いられている『四部叢刊』に収録されている『歐陽文忠公集』のことで、それは中国の国家図書館に所蔵されている南宋時代の版本に基づいている。詳しくは、注（2）拙稿中の「明代内府本以降の『歐陽文忠公集』系統図」を参照されたい。
- (5) 注（3）拙稿「新見九十六篇歐陽脩散佚書簡輯存稿」において、「35《（與孫威敏公）之三與《歐陽脩全集》書簡卷三《與馮章靖公》、42《與劉侍讀》與《全集》書簡卷五《與劉侍讀》之二十五（注、二十六の誤り）、69《與杜郎中》與《全集》書簡卷八《答杜植》雖有部分文字相近、但從內容上可以判斷並非同一書簡、當從天理本作新出之佚文。於此筆者將別作專文討論」と指摘していた。なお、新発見の書簡については、天理本に収録されている順に1～96の番号をつけた。
- (6) 注（5）参照。
- (7) 洪本健「東英寿教授新見歐陽脩散佚書簡解説」（『武漢大学学报』2012年3期、2012年5月）の指摘による。
- (8) 注（7）参照。
- (9) 周必大編纂『歐陽文忠公集』の巻末に全集の編定校正者、覆校者の一覧があり、編定校正者の一人に丁朝佐が挙げられている。
- (10) 更に『書簡』巻十の周必大らの校勘には「吉綿本書簡有論文史問古事之類。已移入外集第十六十七十八十九卷中」とあり、周必大らが『書簡』を編纂した際に吉綿本を用いたこともわかる。ただ、吉綿本は『書簡』の中に論文、史問、古事等の違うジャンルが含まれており、かなり杜撰なものであったようである。ここから、周必大らは歐陽脩家側に遺されていた資料を基にして、吉綿本を参照しつつ『書簡』部分を整理して編纂したと考えられ、この校勘からも実際の書簡は収集していなかったことがわ

かるのである。

(11) 子孫が先祖の諱を避けて「某」字に変更することは、たとえば范志新『避諱学』（台湾学生書局、2006年）105頁に「今案書某避諱、其例亦古」として、『尚書』や『史記』の例をあげて説明する。なお、同書については九州大学人文科学研究院専門研究員大淵貴之氏にご教示いただいた。

（付記）本稿は、JSPS科研費22520368の助成を受けたものである。

Several Features of the Newly Discovered Letters of Ouyang Xiu: With Special References to the letters 35, 42, 69, and 70

Hidetoshi HIGASHI

ABSTRACT

I discovered 96 letters written by Ouyang Xiu of the Northern Song dynasty of China, of which the existence was not known at all. Four out of 96 newly found letters correspond to the letters contained in the popular edition of Ouyang Xiu.

In this paper, I bring out some features of these four letters through comparing the two different editions of the collected works of Ouyang Xiu in which the letters are contained. As a result, it turned out that the texts are deliberately elaborated in the newly discovered version.

The fact that newly found letters are specified with the recipients' names unveils that these are the letters which Ouyang Xiu really sent to the addressees. Conversely, the letters contained in the popular edition are the manuscripts stored in Ouyang Xiu's home. This discovery may provide a clue to resolving how the compilers of the collected works compiled the correspondence.